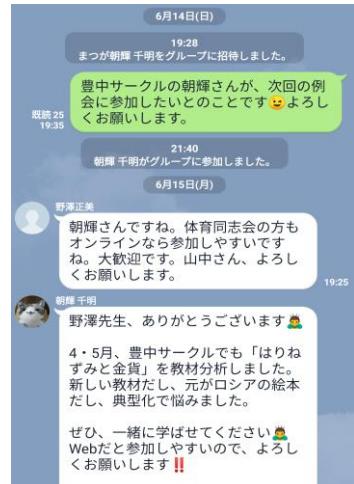


文芸研ニュース

2020年6月26日
-NO. 155-

発行 文芸教育研究協議会
編集 文芸研事務局

| | 目次 |
|-------|---------|
| 事務局通信 | 卷頭 |
| ・ | 上西委員長より |
| ・ | 各地からの報告 |
| ・ | ・ |
| ・ | ・ |
| ・ | ・ |
| ・ | ・ |
| ・ | ・ |
| ・ | ・ |
| ・ | ・ |
| ・ | ・ |
| ・ | ・ |
| ・ | ・ |
| 21 | 6 |
| 6 | 1 |



枚方サークル、ある日の LINE

六歳の春ランドセルを抱き眠る*1

「コロナ時代」の学校とは

上西信夫（文芸研委員長）

1. 国家の教育への介入としての2・27休校要請

5月25日緊急事態宣言が首都圏・北海道も解除され、3月2日以来、約3か月ぶりに全国的に学校が再開されました。首都圏・北海道より一足早く解除された地域の2か月遅れの入学式の様子も報道されていました。「3密」をさけるための分散登校や学級を分割しての授業など、まだまだ以前の日常に戻ることはできませんでしたが、第2波・3波の再来に備えながらの「新しい日常」がスタートすることとなりました。

学校再開を喜ぶのは当然ですが、今回の一斉休校から教育の独立性に関わる問題点を確認しておかなければなりません。安倍首相の唐突な「2・27一斉休校要請」は現場に大きな混乱をもたらしました。（「文芸研ニュース」154号参照）子どもたちの一生の思い出がつくられていたはずの大事な時期の休校でしたから尚更のことです。現政権が繰り出す行き当たりばつたりの施策からは、政治の劣化を感じる

ばかりです。

二度とない六年生の三月も一年生の四月も奪わる

(白井市 矢車蒼子「朝日歌壇」以下同)

新型コロナウイルス拡大地域でない地域も含めての全校休校要請は拙速ではなかつたのか。初期対応の遅れが国民の反発・批判を招き、そのことを糊塗するためのショック療法・リーダーシップの誇示という指摘もされています。「やつてる感」のアピー・ル・サクラ疑惑の隠蔽…とも。

コロナ禍で何かを忘れ春が行く (筑紫野市 二宮

正博「朝日俳壇」)

ワスルルナモリカケサクラクロキカワ(長谷川櫂)の返句も。

一斉休校は専門家に諮らない独断であり、翌日の記者会見もプロンプターに映し出された官僚作成の文章を読むだけで、一斉休校の科学的・合理的説明もありませんでした。

鼻か顎かどちらか隠せない布マスクの如きコロナ

対策 (観音寺市 篠原俊則)

何遍も同じビデオを見せられているかの如き総理の会見 (埼玉県 島村久夫)

そもそも首相に全国一斉休校にする権限「憲法26条の子どもの教育権を奪う」があるのでしようか。「要請」とはいえ実質的には全国一斉休校がおこな

われてしまつた事実は、行政(国家)の教育に対する介入そのものです。「教育は不当な支配に服することなく」(47年教育基本法第10条、06年「改正」教育基本法16条)の文言の持つ意味の重さを考えなければなりません。「不当な支配」とは第一に国家の教育への介入のことをさします。アジア2000万人、日本300万人の命を奪つた敗戦の厳しい反省から、国家が教育の懐に手を突っ込んではいけないことを戒めているのです。全国一斉学力テストをはじめ、行政(教委)による学校訪問や、儀式的行事における「日の丸・君が代」の強制、皇室関係者の死に際して弔旗を掲げることや、全国同一献立(カレーの日)に反対してきた世代からすると、今回の強権発動と、それに対する同調思考が危うくて仕方がないのです。10年前に現場を去つた者の戯言と一笑に付されるかもしれませんが…。

少数ですが一斉休校に異議を唱えて、地域の実情に応じて柔軟に対応した自治体があつたことが救いでした。

2. 「コロナ時代」の教育とは

新学期が始まつてゐるはずの4月7日に「緊急事態宣言」の発令があり、一斉休校が延長され出口の見えない混乱状態が続きました。長引く休校措置で

オンライン授業の必要性・有効性も提唱・認知され、財政措置も講じられようとしています。次善の策としてその必要性・有効性は認めつつ、しかし、本来の同じ空間（保育園・幼稚園・学校）での幼児期・学齢期の教育は決定的に重要です。

「Society5.0」先生も教室もいらない時代が来る「公教育解体の危機、教育・ICT産業が学校教育を乗つ取る」（「文芸研ニュース」152号）でも書きましたが、子ども・生徒全員に端末タブレットを持たせたオンライン授業で、終息後に協同の学習よりも「個別最適化された学び」が一気に広がることを危惧します。

「朝日歌壇・俳壇」にも子どもを詠む歌や句が多く投稿されています。

新しい国語の教科書帰つたらすぐに読みたい四月の楽しみ（奈良市 山添葵）

昼日中一人球蹴る少年の背中に少し怒りがにじむ（中津市 瀬口美子）

ぼくはもう大きくなつちゃうよ東京のパパはじしゅくで帰つてこない（藤枝市 石塚文人）

陽炎のバリアで遊ぶ子供たち（福岡市 松尾康乃）

六歳の春ランドセルを抱き眠る（宇治市 山田修）

* 1 5月 24日入選句

入学を心待ちにし、ランドセルを抱いて眠る6歳の子の膨らむ思いに応えるために、とびっきり上等の学校教育を用意しなければなりません。再開した学校が以前のままの学校―学力テスト体制、資質・能力主義、スタンダードの旧秩序の再現では意味がありません。再開後の目標が、授業時数の確保のみに矮小化しては「コロナ時代」の学校として子どもや国民の期待に応えることはできません。

徳水博志さん（宮城文芸研）が3・11以後の罹災地・石巻市雄勝小学校の復興教育における学力を提起したのと同質の問が投げかけられています。（「文芸教育」誌95・96・97号他）

今回の一斉休校で、学校にはいかに不要不急の業務が多いかが見えてきました。学校が再開されれば、子どもたちの机や手に触れるあらゆる物の消毒が必要であり、「密」を避けるために分割授業の対応等、従来に増して仕事量が増えオーバーワークになることは明らかです。行政は、教員を増員し、不要不急の業務の削減、感染予防に必要な物資・器材の支給など、条件整備に専念することです。（全国の小中高校・特別支援学校に100～300万支給、3100名の教員増といいますが、フェイスガード・消毒液などの現物支給が急務。全国約3万の小中学校に対して3100人の増員つて：一桁少ない！　補正予算をめぐる国会論戦

で、野党党首が「コロナ対策として100000人の教員増で少人数学級を実現し、子どもたちへの贈り物したい。1兆円の財源で実現できる」と安倍首相に迫ったのと対照的です。)

3. 科学的認識力と想像力

5・26 朝日新聞に歌人で細胞生物学者の永田和宏氏（J.T.生命誌研究館館長 京大・京産大名誉教授 宮中歌会始・朝日歌壇選者 著書「近代秀歌」「現代秀歌」など）の寄稿文が掲載されました。永田氏は、こんな時にこそ科学的に正しい知識を人々に知つてもらい、それに基づいた行動が必要だと説き、朝日歌壇に入選した2首を紹介しています。

さらに自分自身の中にわき起くる不安や恐れ、あるいは他者への苛立ちや猜疑心などに、理性的に対処しながら、共に生きる道を模索できるようになること（慶應大 佐久間亜紀氏）です。

それと同時に、困難な時代であればあるほど他者の思いに共感できる想像力を育てることです。永田氏は同欄で、話題になつた首相のあの動画について以下のように続けます。

スを拡げているのだ（西東京市 服部秀星）

ウイルスをゴルフボールとするならばマスクの

メッシュは網なき網戸（長野市 原田浩生）

一首目は《変換》で、二首目は《類推》の認識方

法で見事に本質を射貫いています。「ウイルスは厳密には生命体ではない。勝手に増えることもなければ、人間を狙つて攻撃しているわけではない。まさに、人が接触によつて拡げているだけなのである。2首目のようにウイルスのサイズを知れば、布マスクを配布するのに400億円超の予算を計上するという政

収入の減らぬ總理が犬を抱きソファーで本読む動画を上げる（観音寺市 篠原俊則）

犬を抱きお茶飲む人のツイッターに35万の「いいね」つく国（寝屋川市 今西富幸）

自肅要請をした当人の動画としては、あまりにも想像力を欠いたものであつたと言わざるを得ません。常套句の「国民に寄り添う」などという上から目線でもなく、「うだらうと思う」と他人事のように言いなものは、自分が相手の立場だつたら何を欲するか

を想像できる能力です。この場合の相手とは、

テレワーク出来ない人が支えてる文明社会の根 つこの部分（諫早市 藤山増昭）

という歌が端的に表すような境遇の人々です。日々の生活費に窮する人々、テレワークによつて身の安全をはかることのできない職業に就いている人々への想像力が少しでもあれば、あの優雅な動画を流すという発想は決して生まれなかつたと述べています。

言うまでもなく想像力・認識力・表現力を育てる任務を担つてゐるのが国語科教育の領域です。「コロナ時代」にこそ教育の原点を見つめ直す機会にし、文芸教育の重要性を確認したいと思います。

4・西郷竹彦生誕百年の年に

多くの為政者が新型コロナウイルスを「敵」と呼び、「ウイルスとの戦争」に「打ち克つ」「撲滅する」対象としてとらえ、大言壯語癖のある安倍首相に至つては「人類が新型コロナウイルス感染症に打ち勝つた証として」東京オリンピックを開催するとまで言い出しました。（「アンダーコントロール」の「復興五輪」というスローガンはどこかへ吹つ飛んでしまいました。）

福岡伸一氏・中村桂子氏をはじめ生物学者は、人

類とウイルスは生命誕生の40億年前から共存してきたと述べています。近いうちにワクチンや特効薬が開発され、ウイルスに打ち克ち明るい未来がやつて来ることはないと言います。長い時間軸をもつて、リスクを受容しつつウイルスとの動的平衡をめざすしかないとも。感染症の原因となる微生物も今地球上に存在するすべての生物は、40億年前から途切れることなく共進化してきた子孫同士ということです。「打ち克つ」というのではなく、実害を最小化するという考え方（科学的認識）が大事なのではないかという生物学者たちの声は首肯できます。

桜桃の季節、4度目の6月12日が巡ってきます。今年は西郷竹彦生誕百年の節目の年でもあります。

日課のウォーキングで井の頭公園からジブリ美術館、山本有三記念館を経て、太宰が入水自殺した玉川上水、墓所の禅林寺までを歩きながら、今回のコロナ禍の試練を西郷先生ならどう語るか考えました。

『狼森と笊森、盜森』で宮沢賢治は「人と森との原始的な交渉で自然の順違二面が農民に与えた長い間の印象」と語っています。「順違二面」とは、「に順（したが）うと同時に、「に違（たが）うの相補の意で、賢治の二相ゆらぎの世界観の表出です。西郷先生が、特別講座「風の又三郎」で台風の順違二

面性にふれたように、先の生物学者同様、相補的な見方・考え方をきっと展開していたのではないでしょうか。

学び合えるよろこび

青森文芸兼津軽サーカル 斎藤千佳子

【参考文献】

『クレスコ』2020年5月・6月号 全日本教職員組合

大月書店 連載「世界の取材現場から見た日本」金

平茂紀（TBS「報道特集」キャスター）

『世界』2020年6月号 岩波書店 特集「生存のためにコロナ禍の元の生活と生命」

五月七日、二度目の臨時休業が明け、（津軽地域ではほとんどの学校が七日に再開）再び子供たちのにぎやかな声が学校に戻ってきました。その後の学校の様子をお伝えします。

学校が再スタートしたとはいえ、全員マスク着用はもちろんのこと、全校で一堂に会する集会等の自粛、音楽では歌つてはならない。ペア学習やグループ学習など密接になる授業形態はご法度。一学期の行事は、運動会、参観日、水泳教室、他校との交流学習、施設へ出向く校外学習等、すべてが中止となりました。教室の中で密を避けながら限定された教育しかできません。子ども達は、学び合いの中で育つってきたこと、それが今は奪われていることを改めて感じています。

臨時休業で実質八日間削られました。東京や北海道などに比べるとたくさん出校できた青森ではありますが、四月には、『前学年の三学期分の未履修の学習を優先せよ。』と言われ、連休明けには『四月の遅れを取り戻すために四教科に重点を置いて指導せよ。』と言われました。長く休んで生活のリズム



も戻らないままなのに学力優先？ 体育や心の教育は後回し？ 子供たちの心のケアはどうなるの？：と、理不尽に思うことばかりでした。六月末現在になつてようやく生活のリズムが戻り、学習進度も年間計画にほぼ近づくことができました。まだまだ三密は避けなければなりませんが、ようやく日常が戻りつつあることを実感しています。

十五日間（実質八日間）の休業しかなかつた本校でもこういう状況ですから、新年度を迎えることができず二か月近くもお休みしていた学校の子ども達の思い、先生方のご苦労は、いかばかりでしょう。その上、楽しい夏休みもきつとたくさん削られるのでしょうか。（私の勤務校では、夏休み入りが一日遅く、二学期開始が二日ほど早くなり、結果、三日間短くなるだけで済みました。）皆さんの地域の夏休みはいかがでしょう？

何も気にすることなく、普通に大きな口を開けて笑い合つたり、元気に歌つたり、頭を寄せて話しあつたり、当たり前の学び合いができるのはいつになることでしよう。

さて、津軽文芸研のサークル活動についても報告します。津軽サークルでは、五所川原市の学習センターを学習会の拠点にしていますが、四月・五月は閉鎖のため、皆で集まつての学習会ができませんで

した。何分、若い人材が少ない我がサークル。今話題のビデオ会議の環境を整えることもできませんでした。集まることが出来なくとも何らかの方法で、何かしらの学びはできないものか：と暗中模索していた時に、大阪の枚方サークルから、リモート学習会へのお誘いがありました。有難く参加させていただいています。いつも二、三人だけの参加ですが、作品についてあれこれ語り合い、学びえることができる喜びを感じています。枚方サークルの皆さんには感謝、感謝です。

そうこうしているうちに、六月から学習センターも使えることとなり、晴れて、六月十九日に今年度開催することになりました。久々にサークルのみんなの顔を見ることができ、ほっとするとともに、これからもこの学習会の火を灯し続けていきたい

と強く願いました。



コロナでの臨時休校中の対応

一教員一人一人の感性で、

学びの場を豊かなものに――

東京文芸研 大西城司

まずは、自己紹介として

教員として十年目。勤務校（足立区小学校）では、異動して二年目です。昨年度からの持ち上がりで六年生の担任をしています。生活指導と対をなす「学習指導部」を任せています。学習指導部は、学校全体の児童の学力向上のための取り組みと、校内研究を通して教員の指導力の向上を目指す部のことです。残念ながら、校内研究は国語ではなく、算数です。

さて本題の「臨時休校中の対応」について、足立区の一教員として、どのような働き方をしてきたかを伝えていきます。

（1）三月から六月の教師の働き方

臨時休校中は、自分のための仕事は最小限に留め、学校全体のための仕事を優先しました。なぜ、この

ような働き方をしたかと言うと、二つの理由があります。

一つ目の理由は、学校の整理整頓がうまくいってなかつたからです。職員室の棚に空きはなく棚の上に荷物が溢れている状況でした。研修室やパソコン室、理科室、要録を保管する金庫ですら同じような状況です。とにかく、不必要なもので溢れ返っている学校だったのです。

手始めに研修室の不要な物の処分から始めると、二十年以上前の学校日誌や出勤簿などを発見。溶解文章として処分。不要な物の処分を繰り返し、計十数箱。また、パソコン室の古い設備なども業者に連絡し、撤去、処分などを重ねました。この休校の間に、不要な物を処分し、学校に溢れる物を減らしました。計五トン程、物が無くなりました。普段の学校生活の中では、なかなかまとまつた時間を学校の環境整備に割くことができなかつたので良い機会となりました。

物が減り、保管する場所ができ、保管場所の一覧を作つたことで、困らなくなりました。勤務校は、若手の先生が多いので事務作業の手順、保存期間をまとめ、共有しました。

学校全体の仕事を優先したもう一つの理由は、教員の「意識」の差が大きかつたように感じたからで

す。昨年度は、三月の中旬になると、次年度の学年が言い渡されました。すぐに、各担任は次年度の事務処理、学級開きの用意などを着々と進めました。しかし、六年生の担任は卒業生との式（三月下旬）が終わるまでは、他のことに取り組めないものです。六年生の担任は、他の教員から来年度の打ち合わせをお願いされ、「まだ卒業式が終わってないのに、みんな来年度の事ばかり。」と不快な気持ちを吐露する場面も見受けられました。この意識の差は、少なからず日々の働き方の中に存在することだと感じます。この意識の差を埋めることが、職場の雰囲気を良くすることだと私は考えています。

このように学校の職員の様子を俯瞰していましたが、私自身三月末までは、卒業式の有無、式の実施方法等に右往左往した日々でした。卒業式委員会の長であつたので、区の要請、卒業生の想い、卒業生の担任の想い、保護者の願い等に配慮して提案を重ねました。区の新しい決定がある度に、それに合わせて工夫を凝らし、各々の先生に仕事をお願いしました。どの立場の方からも納得の声が聞けました。

（2）分散登校での子どもの様子

勤務校では、四月になると「週に一度の家庭への電話連絡」が仕事の一つになりました。以前は、保

護者と共有したい情報があるから担任が自らの意図で電話を掛けたり、家庭に訪問したりしていました。その際に、学校での近況を報告したり、家庭での様子を聞いたりと双方のやりとりをしていました。この間の保護者への対応は、学校としての必要から行なっています。教育委員会への報告があるので、担任は各家庭に電話連絡をしました。共通の質問項目に沿った一方通行の質問を事務的にしていくように感じました。

五月は、週に一度の登校日を設けました。登校時間は一人一人区切り、登校した子どもたちに課題を渡す。これを一ヶ月ほど、繰り返しました。この課題づくりと採点には、どの先生方も苦心されたのではないかなど感じます。

六月からは分散登校が始まりました。勤務校は、段階的に分散登校を進めています。学級の三分の一の児童が三日に一度の出席を五巡する。計十五日、三週間に渡る分散登校。四週目からは一斉登校が始まります。

子どもたちは最初の内は慣れない動きに戸惑いを見せていましたが、だんだんと少人数での関わりを楽しんでいます。昨年度まで別室登校をしていた子や学校に来られなかつた子が、教室に入つて他の子と一緒に授業を受けたり、放課後の教室で学習をし

たりしてます。緩やかな時間の流れが与えてくれた嬉しい変化です。

（3）各自の立場で責任をもつ

文部科学省は都道府県へ、都は区へ。区は学校へ。方針あれど現実味がなく、日毎に変わる決定に現場は疲弊していきました。どの立場でも「責任を取らないように上手くやろう」とする魂胆が透けて見えるのが、実に残念でした。

休校になつてすぐ、勤務校ではインターネットを使つた補充など準備していました。最初は校長先生も乗り気でいましたが、区の要請でストップしました。

学校単位ではなく、区の学校全体として足並みを揃えて動くということでしたが、この考へでは緊急事態にうまく対処することは難しいように感じました。何か新しい試みを一つの学校で試験的に導入し、効果を見た方がいいのではないかと考へたからです。また、「子どものためできることを」と常々言つていた校長が、区の言つことに何も言わないので、実に残念に思いました。校長として責任ある行動があれば、現実は少しは変わつたのではないかと感じています。

教育委員会としても第二波への独自の備えはないようです。例えば、先週のことですが、教育委員会

が一斉登校前に学校に視察に来ました。私のクラスは三八名いるので、登校しただけで密になります。そのために、「ロッカーを廊下に出す」など教育委員会は提案してきました。「子どもの持ち物が教室外にあると、様々な問題が起きるので無理だ」と答えると、サーキュレーサーが配られることになりました。このように、三密を避けるための行動に無理が生じています。授業では「スタンダード」を要求しますが、それは現場の力を信じることのできない裏返しのようにも思えました。

また、一方で「教員自ら」が前例主義に隸属している節もあります。移動教室や運動会への執着は、どこかで疑問を感じます。確かに、行事によつて子どもは成長しますが、安全、命に代わるものはありません。子どもたちの様子を見ながら、これからできることをゼロベースで一緒に考えていくことこそ、大事なのだと思います。できないことに責任をもつて「できない」ということも、今年は特に大事だと思います。

コロナでの対応は、教育現場にたくさんの困難を提示しています。この困難に処するたつた一つのスタンダードはありません。目の前の子どもたちと向き合い、教員一人一人の感性で、学びの場を豊かなものにすることが求められているように感じます。

相模サークルより

相模サークル 倉富寿史

自分が勤めている学校は私学なので、公立小とは違った対応をとっています。前回は相模サークルの庄司先生（勤務校が同じ）が説明されました。今回も私学の動きや悩みについてより詳しくお伝えします。

①長い休校期間の始まり

横浜市は、小中高校と特別支援学校の休校を3／3火から始めましたが、精華小学校は2／26水に決めて翌日から休校としました。決断をする上で参考にしなければならなかつたのは、公立小と他私学の動き、神奈川県教育委員会と横浜市教育委員会の指針でした。また、公共交通機関を使って児童は登校すること、1日平均の乗降客数は約230万人という横浜駅が最寄り駅であることなども、考慮しなければいけませんでした。その後の数回にわたる休校延長の決定も、様々な情報をもとに判断しなければならなく、また自分は教務主任（+6年担任）なので、改めて私学の良し悪しを身をもつて体験しました。

③6／1月からの生活

精華小学校は入学式を行つていなかつたので、6／1月に始業式、6／2火に入学式を行いました。6／3水～6／5金は奇数番号の児童が午前登校、偶数番号の児童が午後登校となりました。6／8月からの生活リズムは奇数組と偶数組が日替わりで別々になる隔日登校に、授業は40分間になりました。40人学級が20人学級となつたので静かに授業を進めていますが、グループで話し合うことや集団で活動することはできないのでとても違和感があり、「非常時」は今なお続いていることを痛感しています。また本校は、同じ教科を両クラスに教える仕組みなので、1つの授業を4回も行わなければならぬ苦

長い休校期間は、あつという間に終わつた印象です。GoogleのClassroomを使ったオンライン授業で国語の授業を10分以内に収めてYouTubeに載せて配信するという慣れない仕事、そしてMeetを使った保護者面談と遠隔会議（約10回）・・・。この3ヶ月は仕事の連続で、よくもまあ心身を崩さずに乗り越えたなあと自分自身を褒めたい気持ちです。（この休校期間中に作つた会議資料は30を超えた・・・。）

労もあります。（正直言つて、4回目は飽きます
ね・・・。）

休校期間が長かつたため、6月の上旬までは子どもたちの体力が心配でしたが、中旬に入るとより元気な様子が見られたので、生活リズムの定着というものは心身の健康を保つ大事な軸だな、と改めて感じています。

「一見」 ふつうの学校風景
くだから気づいていきたい
学校も全員登校、通常時間割りがはじまり、しばらく経ちました。

授業もクラスも、学校全体も特に違和感はありません。「普通」が戻ったように感じます。はい、「一見」 そう見えます。ですが、一人ひとりをよく見て対応したり、ゆっくり話を聞いたり、安心できるようにしていかなくてはと思うことがあります。

私は今年、3年生 25人の担任です。落ち着いている小規模校（各学年2クラスずつ）、クラスは穏やかで真面目で優しい子ばかりです。でも、そんな25人しかいない子どもの中にも気になる子がいます。

まずチックの出ている子が4人いました。「新年度は例年チックが出るが、今年は長い気がして心配です」と保護者から3人連絡がありました。そのうち2人はまだ強いチックが続いています。授業中、何度も頭をぐるぐる回していて、特に午後が多いです。疲れているのだと思います。もう一人は一日中、

大阪文芸研豊中サークル 朝輝千明

髪の毛を触つて抜きまくつているので、登頂部が大きく地肌が見えてきました。本人は気づいていないもようです。

今年度はラッキーなことに、週一でSSWの先生

が学校に来ているので、直接子どもの様子を見てもらいました。「チックは言葉にならないストレスの表れ。安心できることが大切」とのことでした。安心できるクラス、楽しくて思いが発散できるクラスにしていこうと楽しいクラスづくりを心がけています。疲れている子が多く、でも時間割りはどうにもならないので、ゆっくりする時間も持つつつ、やつぱりこの時数は子どものためにならないから、變えていかなくては!と思う日々です。



前号の文芸研ニュースで全国各地の対応や先生方が考えておられること、こんな状況だからこそ大切にしたいことをたくさん知り、改めて考えさせていただきました。

私は教員になつて必至で駆け抜けているうちにあつという間に経験年数は十数年経ちましたが、まだまだ自分に足りないものがあると感じ、サークルには最近になつて参加させていただくようになりました。先輩方のお話や教材の見方にいつも感動して、少しづつ自分のものの見方・考え方も耕されているような気がして、楽しく例会に通っています。

五月までは、先の見えないことが多く、家庭での学習課題、子どもたちの心と体の健康、私たちの働き方、今後の教育活動等、気がかりなことや不安なことがいっぱいでした。その中でも日々「この時間を有効に使えないか」「今だからこそできることは何か」を探して色々と試してきました。長期の計画と短期の計画を立て、何度も修正してきました。コロナの状況や国や教育委員会の指示であらかじめ考

『新しい「学校」生活様式』を模索中…

大阪文芸研枚方サークル 森 笹公美

えてきたことが二転三転してきたりもしましたが、対応力を問われている時期だなと思い、職員同士で話し合うことで一つひとつ乗り越えてきました。

○子どもが学校に戻ってきた！

枚方市は、五月の中旬から週二回程度の分散登校が開始され、ようやく子どもたちと会えました。ほんの二時間程度でしたが、名簿や引継ぎ、紙の上ではしか見えなかつた子どもの姿を見ることができ、新学年のスタートだと目を輝かせている子どもたちと向き合い、一人ひとりの個性を一つずつ引き出していく本来私たちのしたかつたことがやつとできる幸せを噛みしめました。やはり学校に子どもの声が響くと活気づくものです。分散で一グループ十数人ずつですが、健康観察カードを一人ずつ見せてもらひながら挨拶をしたり会話したりすることが嬉しくて楽しくて、力がわいてくる時間でした。一方で、感染対策を講じるために、距離をとつたり、大きな声を出せない等、これまで当たり前にできていた、本来なら心の体温を上げたり、子どもたちのコミュニケーション力を高めるためにしたい活動がしづらいことは葛藤でした。また、下校後の消毒や清掃作業も大切だとは理解していてもなかなか時間をとられることだと感じました。

六月の前半は、毎日の分散登校となりました。授業も三時間ずつ進めていきました。昨年度末の休校による未履修内容から入り、本来の学年の学習内容に少しずつ入っていきました。どの教科も時間数が厳しいため少し急ぎ気味ですが、「こわれた千の楽器」は丁寧に読み合いたいと思いました。壊れているなんて思いたくない、また演奏をしたい楽器たちの気持ちにたっぷり寄り添つて、練習を積み重ねる時のイメージもしつかり膨らませて、音楽になり月に聴いてもらつた時の達成感や充実感を語り合いました。以下は終わりの感想です。「私が好きなところは、ビオラがたくさんのかわれた楽器で一つの楽器になることを提案してから楽器たちが元気になつていくところです。ビオラのおかげで暗かつた楽器倉庫のふんいきが明るくなり、楽器たちが幸せそうになつたからです。私もビオラのように、みんなの気持ちを明るくできる、やさしい人になりたいです。」「楽器たちがうまくなつたのは、毎日毎日練習にはげんだからできました。毎日毎日がんばれば、かならずできるということだから、私もなにごともあきらめずにはすればいいことがわかりました。」「ぼくはビオラはすごいと思いました。なぜかと言うと十がだめなら十五で、十五がだめなら二十で一つの楽器になるんだ。」と、他の楽器たちがなつとく

いくべらいいつしょうけんめい言つてゐること」が分かります。「それは名案だわ。」とピッコロも言つたし、「それならばくにもできるかもしねない。」

ともつきんも言つて、「やろう。」「やろう。」といろんな楽器たちがみんなビオラといつしょの気持になつたからみんないなあと思いました。」

六月後半からはいよいよ全日授業が再開しました。

感染予防の対策を講じる中での教育活動はもどかしいこともたくさんあります。先程も述べたように物理的なコミュニケーション活動を取り入れにいく中で、私自身もアプローチを変えていかないといけないと考えさせられています。

「大阪府教育庁」から出たマニュアルの中に書かれていました。「対話的な学びとは、子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深めること」であり、「ペアやグループでの話しあい活動だけではなく」「ノートや付箋、ICT機器などを利用して、自分の考えを書いて伝え合うこと」も「文学作品を鑑賞して、作者の考えを想像しながら行う『作者や作品との対話』」も「前時までの学びを確認したり、振り返ることで、過去の自分と対

話し、自己の考えを深めたりすること」も「対話的な学び」として考えられますと。

方法としては遠回りだなど感じることもありますが、感染予防対策中でも、子どもたちをつなぎたい、高めたいという思いはぶれません。これまでも続けてきた「作文」で、まずは私と子どもが対話をし、つながっていきたいです。そしてそれをクラスの子どもたちに返していこうと思います。友達を理解すると同時に、見方や考え方も広げていきたいからです。学級通信で私のメッセージも届けながら、子どもの活動、学び、表現したものを価値づけていきます。地道ではありますが、こんな時代でも大切にしたいものは変わらないと信じています。

また、私自身、柔軟さも持つて新しい挑戦もしたいくつも思っていますので、今後、新しい学校生活様式に合う授業づくりのアイデアがありましたら教えていただきたいです。

○新しいサークル様式

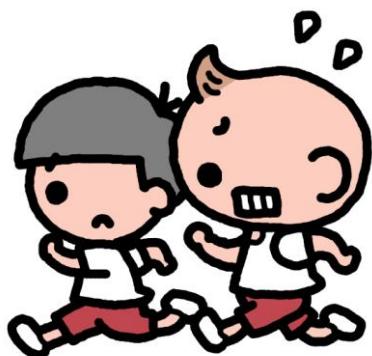
枚方サークルはZOOMで四、五、六月は八回程、オンライン例会をしてきています。四月と五月前半は実践研のレポートを読み合い意見交流、最近は一学期教材の解釈をしています。少しづつ全国の先生方からの参加も増え、オンラインならではの楽しさ

も実感しています。なかなか会えない先生とオンライン上でお会いできること、方言が聞けること、地域によって子どもの姿が

違つたりしていること等

が新鮮です。今後、さらに参加者を増やしていくたいと考えています。

学び方は柔軟に変えつつも、学びを止めない教師の姿勢は子どもたちにもつながっていくはずです。



では、再開というより、やつと子どもたちと一緒にスタートがきれるという思いでした。

学校再開に向けて

休校に関しても学校再開に関しても教育委員会の伝達が直前にあることも多く、日々変わる状況、少ない情報の中での準備は大変でした。単学級であるため、学年の仕事や校務分掌を多くかかえ、それでも子どもたちの安心・安全な生活について一生懸命考え準備をしている若い先生たちの姿を見て余計にそう感じたのかもしれません。

五月末の一週間は、おそらくどこも同じだと思いますが、学習・生活場面での三密を想定した話し合いを行い、校内の清掃活動、教室の机の配置、手洗い場への足形マーク設置など環境を整え、学校医の意見を聞き修正を加えていきました。

そして、まずは、生活リズムを整え、情緒面での安定を図ること、子どもの実態を把握しながら授業を行うことを確認して六月一日を迎えました。

子どもたちの様子

六月一日、おかげさまで無事学校を再開することできました。隣接する市町や私立校では五月末に分散登校を行っていたところもありましたが、市内の公立小学校では家庭学習を基本としていたため、ほとんどの子どもが家庭で過ごしていました。本年度転勤したばかりで学級担任をしていない私にとつ

ては、ありがたいことに、現在、ほとんどの子どもが登校できている状況です。久しぶりに友だちに会えたことを喜び、「家で勉強するより学校がいい」という

声も聞きました。

しかし、他校の様子を聞いても、生活リズムが崩れていたり姿勢を保つことや話を聞くことが難しくなつたりしている状況がありました。三ヶ月の休業が子どもに与える影響は想像以上に大きかつたのだと思います。

休業中の学習内容については、当然ですが、個人差がありました。子どもたちの実態が十分つかめない四月、五月に、それぞれ数週間分の学習を数日で検討し作成したのですから、課題にも問題があつたのかもしれません。

今後の課題

マスクをしていると表情やつぶやきがつかみ難く困っています。子どもの実態をどう把握し、限られた時数の中でどのように授業を組み立てるか…、学ぶ楽しさを子どもとともに取り戻していきたいと思っています。

また、現在、朝の体温チェックや給食前後や放課後の消毒などコロナに関連した業務が増え、先生たちの負担も増えています。遊びや生活、学習面で「新しい生活様式」をどのように見直し継続していくのかも今後の課題となりそうです。

コロナ禍だから見つけたこと

広島文芸研広島サークル 吉田剛人

コロナ禍ですが、広島では通常通りの登校が再開されました。

一教室に30人。机は離した状態ですが、やはり密です。「三密を避けるように」なんて言われていますが学校の中では現実的には無理で…。

三密を避ける？

私の勤務する学校では接触をさけるためにということで、

例えば、

机を隣や班でくつつけるのは禁止

飛沫が飛ぶので歌、リコーダー、

鍵盤ハーモニカは禁止

マット運動と飛び箱は接触部分が

増えるために禁止

トランプやUNOなどカードゲームは禁止

おにごっこは接触するので禁止

給食中におしゃべりは禁止

調理実習は禁止

実験用具や図工などの道具の共有は禁止

英語の学習でのコミュニケーション

活動は禁止 など

挙げればきりがないのですが…。禁止だらけです。それに対しても程度は文句を言つたり、そのバカバカしさを訴えたりはしたのですが、変わることはありませんでした。「そもそも教室は密なのですから、禁止！禁止！」と言つてどんな意味があるの？」と、私はプリプリ怒つっていました。

ルールはルールだけど…でもね！！

しかし、子どもの方がかしこかつたです。

ある日、子どもたちが近寄つてきて、「先生。消しゴム落とししてもいいかね？」と。「もちろん〇Ｋよ」と。すると、教室の2～3か所に消しゴム落としを楽しむ子どもたちの笑顔あふれる集まりができました。

また別の日には、「先生、パプリカのCD流してく」と。すると、女の子たちがパプリカを歌いながら踊つて楽しむようになりました。

また別に日には、「先生！新おにごしたんじや」と。次の日例外を見ると、ハンカチを握りしめて走っている私のクラスの子を見ました。素手で触つたらいけない。だから、ハンカチ越しにタッチするお

にごっこをしているわけです。

笑つちやいました。そして子どもはいいなと思いました。決まりは決まりでそれに歯向かおうとはしないものの、禁止でない範囲で、子どもたちはともに関わり合い、そして自分たちの楽しみを見つけていっています。

コロナ禍で禁止が多くても、子どもは柔軟に考え、自分たちで楽しさを見つけていけるんです。

やつぱり関わりたいんだな…

また、10日ほどたつたころでしようか。ある子どもが「先生、お隣さんと席をくつつけたい」と休憩時間に私の周りに集まつてきていた女の子が言いました。すると男の子が「おれも」と。「なんで？」つて聞いたら「さみしいじやん」、「一人ぼっちな感じがする」と気持ちを教えてくれました。

また、給食の準備中に、「先生？班の形にして食べたい」と。「ご時世的に、さすがにマスクなしの給食時間に班机というわけには…」と言いました。でも、友だちの顔を見ながら食べたいし、おしゃべりもしたいという子どもの気ものはわかりました。ですから、ちょっとでもまわりの顔が見えるように機の配置を工夫しました（飛沫が飛ばないよう）。

コロナ禍だからこそ分かつたこと

友だちのそばがいい、顔が見たい、話したい、触れ合いたい……コロナ禍でなければそういう子どもたちの訴えはなかつたでしょう。でも、いろいろな

かかわりが禁止されている状況だからこそ、関わりたいという子どもたちの気持ちをしつかりと感じ

ことができました。私は、最近の子どもたちは関わりたいという気もちが希薄なのではないかな?と思つていました。だけど、それは私の思い違いでした。

よかつたです。本当に。

もう一つ

最後にもう一つ見つけたことがあります。「やはり子どもはかわいい」、そして「クラス担任として子どもと過ごす時間は幸せな時間だな」と。

できました。コロナ禍で禁止事項は多いですが、今、子どもたちと触れ合えるこの時間がとつても楽しいです。

この制約の中でも

山口東サークル　國田　真美

この夏、全国大会が行われるはずだつた山口県。私の勤務校はまさに会場予定の山口市です。6月

6日現在で、この一か月間、県内にコロナの新規感染者はありません。小中学校は分散登校などではなく、ほぼ通常通りに授業が行われています。ただし、夏休みは市町によつて期間に違いがあるものの軒並み短縮が決定。我が家は子なぞ十日しかありません。多少は覚悟していたとはいえ、正直げんなりです。

子どもたちの様子はといえば、勤務校ではボール遊びもオニゴツこも禁止、歌も鉄棒などの遊具も使えません。室内でのかるたも禁止、給食は無言……と、制約だらけではありますが、子どもたちはなんとか工夫して遊び、ようやく取り戻した学校生活を楽しんでいるようです。

私は初めての4年生担任。



学校が臨時休業になり担任として子どもと向き合えない時間があつたからこそ、向き合う時間の大切さと幸せを感じることが

社会科では、清掃工場や浄水場の見学ができず、ごみ収集車の出前授業もダメ、校区内のごみステーションへ行くことすら、2m間隔で歩けないかもとストップがかかりました。子どもたちとそんな状況を嘆いていた翌日、「うちのごみステーションは鍵がかかるタイプだつたよ。」「平川〇〇番つて番号があつたよ。」などと、子どもたちが自主的に調べて報告してくれるではありませんか。写真にまで撮つてきてくれる子どもたちも現れ、それらを電子黒板に映しながら、比較したり推察したりして、楽しい授業をすることができました。

そうか、授業する側も制約だらけではあるけれど、子どもや保護者の力も借りて、できることを探していこう！と前向きな気持ちになれた出来事でした。

初めての『白いぼうし』の授業も楽しかつたです。

ある女の子が、「松井さんみたいにやさしい人になりたいな。友達や家族だけじゃなくて、知らない人や、仲の良くない人にも親切にできるような人になりたいな。」などと書いていて感激！　ああ、私もそんな人になりたい！。

松井さんと違つて私は、「全国大会に来てね！」といふ下心だらけですが、校内で2、3年目の人に文芸研の教材分析を話すと、興味をもつて聞いてるな、という手ごたえを感じます。プレ集会や全国大会に

参加したいと言つてくれていただけに延期は残念ですが、きっと来年でも来てくれる：はず。

全国の文芸研の皆様、来年こそは、山口の居酒屋で、いやいや、山口市内の会場でお待ちしています。

子どもたちに豊かな人

間観、世界観を育むことのできる文芸研の学びを、たくさんのお教員に伝えるすばらしい機会になります



文芸研の未来は明るい

かごしま文芸研 佐多巖

「まさか退職の年に、卒業式までの気持ちの高まり・ふれあいや授業が奪われるとは想定外であつた。何ともやりきれない思い出のお別れとなつた。」

こう語つたのは、以前の職場で人間関係に疲れ切つていた私を支えてくださり、今年退職された先輩である。

全国の子どもたちが涙を浮かべ、悔しさをにじませながら卒業式をあきらめる姿がフォーカスされたあの3月、長年勤めあげられた現場をひつそりと離

れるしかなかつた先輩方が大勢いた。その悔しさはどれほどだつたことだろう。

特に、現場にこだわる教職員として、子どもとともに歩むことを選択されてこられた先輩方の悔しさは想像に余りある。

「学校教育とは、人としての価値、人間関係を学ぶところである」そして先輩は続けて語る。「人権と差別を自覚化していくためには授業をつくることしか方法はないのではないか」

なるほどと思う。コロナショックで大人社会が揺れる中、それに翻弄される人々を見た。やれ「入試延長」や「なら9月入学が・・・」など方針論ばかりが語られた。自称専門のみなさんや、無責任なメディアが世間を煽る中、地に足の着いた考え方だとと思う。子どもを見つめ、本質を語り、心を動かす。ひたすら積み重ねてきた理論と実践に裏付けられた、重みのある言葉だと思う。

コロナショックによつて一つの時代の変わり目を迎えてる今だからこそ、実践に学ばなければならぬと強く感じる。

振り返れば、まだコロナショックの気配もない頃、不安に思つてゐたことがある。それは、いつか教師は「A I」や「動画」にとつて代わられる日が来るのではないかという不安だ。機械が人間を育てる時代が来ると思うとぞつとしたものだつた。確かに、「ステイホーム」や「リモート」が新たに

流行語であることも事実だ。

しかし今、休業明けの子どもたちの前に立つと、不思議と不安はない。なぜなら、「動画」に実践を積み重ねる機能はないし、「A I」が子どもを見つめ、実践を創造することはないからだ。賢そうに見えても「選択」するだけではしかない。

確かに、指導書を読んでなぞらえるだけの授業をしている教職員にはつらい時代がやつて来るのかもしれない。でも、私たちにはむしろチャンスなのではないかとさえ思う。西郷先生の残してくださつた理論と、ともに実践を積み重ねる仲間や先輩がいるからだ。

コロナの被害が比較的に少なかつた鹿児島でも課題は多く、仕事も多い。それでも、私たちには学び合うなかまがいる。文芸研の未来は明るい。

事務局通信

学校が再開され、新しい日常という言葉で日々摸索されていることとります。つながることが教育の大事な課題ですが、そこに様々な縛りがかかり苦慮しながら過ごしています。ただ、子どもたちの笑顔と声が教室に響くのは素直にうれしい日々です。こんな状況ですが、「マイナスをプラスの条件に変えて進みなさい」「なんのための認識論だ。」と西郷

先生の叱咤激励が思い浮かびます。各地でのサークル活動、国語の教室など少しずつ企画し、活動されていることをサークル員で共有し、お互い励ましたながら進めていけたらと思います。枚方サークルでも、ZOOMでの学習会を取り入れ、少しずついろんな方に参加していただきながら模索していきます。もし興味持たれた方がいましたら、お声かけください。

★文芸教育、授業シリーズについての呼びかけ・販売をお願いします。学習会が組織しにくい中ですが、サークルでの学習や学校の同僚への紹介など、工夫して広げていきましょう。

全国大会がない中では、書籍、学習会が運動の柱になります。ぜひ、サークルでのご検討をお願いします。

★サークル会費納入お願い。今年度は、春の実践研、全国大会の延期の影響のあり、振り込みでの納入をお願いします。ご協力よろしくお願いします。